

柳田国男と芸能研究、柳田国男の芸能研究

松尾恒一

Kunio Yanagita and Study on Entertainment; Study on Entertainment by Kunio Yanagita
MATSUO Koichi

- ① 民俗芸術の会の設立と柳田国男
- ② 民俗芸能研究者の〈民俗芸能〉への眼差し
- ③ 柳田の民俗芸能観―祭りと芸能
- ④ 柳田と折口―民俗学における芸能研究
- ⑤ ラコの発見、民俗芸能研究の可能性

【論文要旨】

現在の学会では、柳田は伝承資料としての芸能に対して、すなわち民俗芸能研究に否定的であったとするのが大方の理解である。

各地に伝承される歌謡・舞踊・芝居等の芸能、いわゆる民俗芸能が、民俗学の研究対象として立ちあがってくるのは、大正末―昭和初期の頃（一九三〇頃）であったが、そのはじめのころ柳田国男も関わりもち、民間伝承資料としての芸能とその研究に関心と期待を抱いていた。

その後、戦前・戦後に民俗芸能研究は、本田安次をはじめとする研究者により急速な深化・進展を遂げる。その研究は、演劇学（論）の影響を多分に受けたもので、必ずしも柳田の期待に込めるものではなかったようである。

柳田の民俗芸能に関わる著作としては、祭祀の中の芸能の役割や機能を解析した「日本の祭」（昭和十七年（一九四二））や、民間の宗教者・芸能者に注目した「妹の力」「巫女考」「毛坊主考」「俗聖沿革史」等があり、芸能研究の上でも重要かつ多くの著述をしている。

これら柳田の芸能に関する研究について、ほぼ同時代にやはり民俗芸能研究の上で大きな著述を行った折口信夫の仕事と比較しつつその特質を明らかにし、さらに、現在の都市化する民間での芸能を対象とする、民俗学的方法による研究の可能性を探った。

【キーワード】柳田国男・民俗芸能・折口信夫・祭りと芸能・祭礼・道化